

佳木斯の北方の虎林方面であった。

東北部の黒竜江沿岸は広い湿地帯で、山砲でないとい行動できぬ人跡未踏の地域であった。

ハルピンの冬は零下三〇度〜四〇度の厳寒になり、耳当ての付いた防寒帽、防寒靴や防寒外套、厚手の手袋を用いていた。靴の中には慰問袋に入っていた唐辛子を入れて寒さを凌いだと言う人もいる。

初年兵の中には、鼻先や手先に多くの凍傷ができた人もいた。ハルピン市の緑や煉瓦色のロシア風建物が印象的であった。

このような寒気の厳しい満州から亜熱帯の沖縄宮古島に移動したのは昭和十八年の十二月であった。北方ロシア対処から、南方戦線が厳しくなり、特にフィリピン、台湾、沖縄と、本土周辺の守りが必要になったらしいと、その変化をヒシヒシと感じながらの沖縄移駐であった。

宮古島では陣地構築に全力をあげ、連日の空襲

で、グラマン爆撃機から放つロケット砲弾のうなる音は心胆を震え上がらせた。もうその頃は沖縄本島攻撃が主で、宮古島は孤立されているようでしたが、勿論、我々には知る由もなかったのです。

我々は厳寒の満州から宮古島、沖縄と転戦したのですが、南へ行った沖縄は玉碎し、満州に残った人達はソ連と戦い、終戦で、シベリア抑留、重労働でした。戦いの運、不運は、我々が予測できぬ運、不運であったのです。

二二〇〇キロの行軍

長崎県 田浦 国男

国の為 命捧げる時来たり

涙かくして 送る父母

昭和十七（一九四二）年一月十日、現役兵として、長崎県大村市の西部第四十七部隊歩兵砲隊に

入隊しました。入隊する友達と共に、多くの人達が万歳万歳で送ってくださいました。その人達に交じて吾が子を励ます父母の姿に「行って来ます」と言いながらも感謝の涙が溢れ出しました。大東亜戦争が始まったばかりの重大な時機に、日本男子として御国の為に命を捧げる時が来た。がんばりますと心に誓いながら、二度と父母の顔を見ることはないだろうと思えますと、私よりは父と母はどんな気持ちで見送っているだろうか……複雑な気持ちでした。

私は大正十(一九二一)年十一月十三日、長崎県南高来郡三会村津吹甲で、田浦兼男の長男として生を享け、四十六歳になる父と共に、二町歩の畑を守りながら、農業に汗水流して働いて来ました。

私の入隊により働き手を失う父の気持ちを考えますと、辛い思いであろうと思ひまして、弟に「後は頼むぞ、日本の若者としてお国に奉公することは男子の本懐だ。田浦家の名誉だよろしく頼

むからね」と頼み入隊しました。

大村の歩兵第四十六連隊は、日露戦争時代から今日まで、歩兵部隊として、その精鋭さは評判の名門部隊でした。

昭和十一年には満州東部国境に移駐し、関東軍の最強歩兵部隊として名声を博した部隊だから、訓練は厳しいぞと先輩から聴いてはおりましたが、入隊翌日から一月の寒い中、広々とした練兵場での教練は実に厳格でした。内務班での初年兵の大きな声での返事。一回、一回の申告。軍人勅諭の朗読。「馬鹿者！」と古年兵の叫ぶ声。次にはパンパンと叩く音、まさに男の世界でした。覚悟はして入隊はしましたが、その厳しさは予想以上でした。

男涙を流しながらも少しずつ慣れて来ました。連隊の中の桜が咲き始めた頃、私達は移動を命ぜられました。行く先は北滿の満州第一〇八部隊、大村連隊の主力があります石門子の本部と聴きました。

大村から列車で門司港へ、門司港から船で釜山港へ、釜山の国民学校に集結し、釜山から列車で朝鮮半島を縦断し満州国へ、牡丹江省の城子溝と言う所で下車しました。石川子の部隊まで約十キロを歩くことになりました。

四月とは言え北満の夕暮れ時は寒い。大村では経験しない寒さでした。雪解けのぬかるみを踏みながら三時間位で部隊本部へ到着しました。平家の煉瓦造りの兵舎でした。窓は二重枠で寒さを防いでおりますし、真中付近にペーチカがあつて暖をとつてありました。

早速衣服が交換させられました。「初年兵が来た」と古年兵から喜ばれました。特に今まで初年兵であつた人々の喜びは一入でした。

北満の初年兵生活が始まりました。飯上げ当番、不寝番、初めての既当番、加えて寒冷地での軍事訓練、見る物聞く物初めてのことばかりで戸惑いの連続でした。シベリアからの風は冷たい、

零下一〇度、二〇度でも軍事教練は休みなし、大隊には約百頭の馬がおりますので馬の手入れも大変でした。厩の中の馬糞の片付け作業、蹄の馬糞のめぐり作業、馬への食糧の与え方、水の与え方、馴れるまでの苦労は大変でした。古年兵からは口を揃えて「馬は大切な兵器だぞ、貴様達は一銭五厘で何ほでも補充できるが、馬はそうゆう訳にはいかんのだぞ」と叱られました。

たしかに食べ物、水のやり方で「疝痛せんづ」になる恐れがありますので、皆が注意しました。私は石川子に二年近くおりましたが、外出は一回もしませんでした。理由は馬が心配でした。万一馬が「疝痛」にかかったら班全部が心配するからでした。天皇陛下から頂いた大切な兵器を一頭でも死亡させてはならないと言う心配が一日たりとも頭から離れませんでした。

五月になりますとや々と草の芽が始めます。迎春花、山百合、すずらん、しゃくなげ等が咲き乱れ、すばらしい山野に変わります。夏は暑い、

大陸性気候のため、短い夏ですが内地では味わうことのない暑さでした。夏に困るのは「はえ」でした。特に馬小屋があるためか「はえ」の大群には往生しました。九月中旬になれば毎日に冬将軍がやって来ます。

昭和十八年になりますと、ソ連軍の脅威に備え、対戦車壕掘りに追われました。短い夏を活用して幅一〇メートル、深さ四メートルの壕を掘るため、銃剣がスコップに替わり、壕掘り作業に追われました。

九月が過ぎる頃から越冬準備が始まります。食糧の貯蔵庫の整備、窓の紙張り、馬を厳冬から守るための厩の敷藁の準備が大変でした。柳の木等を切って来てその上に藁を敷き厚くしてやる等。人間の防寒より馬の防寒に大変苦労しました。冬の歩哨、不寝番、厩当番、内地では経験できない辛さでした。

防寒服に身を固めておりまして、二時間立哨

しますと銃に氷の花が咲き、室内に帰りましたも、ガタガタ震え身体が温まりませんでした。

昭和十八年四月、初年兵が入隊してきました。八カ月ぶり初年兵を脱け出すことができたので、これで少しは楽になりました。

北滿の夏は朝四時頃から明るくなり、夜は十時頃まで明るく、眠る時間が短く、みんなが苦勞しました。春先から雪解けで道はぬかるみます。夏は短く冬は長いこの生活を一年八カ月経験しました。

昭和十九年二月二十四日、突然第十野戦補充隊に転属を命ぜられました。即日出発、百人位が連隊本部前に集結し、凍結した道路を城子溝向けて行進しました。初めて見る石門子の風景でした。

城子溝から列車で牡丹江へ。牡丹江駅で下車し野戦補充隊に到着しました。地名は掖河と言う町でした。この地で編成されました私達は防寒具の返納を命ぜられましたので、行く先は暖かい所だ

なあと感じました。そして数日後、行方のわからないまま貨車に乗車出発しました。

ハルピンだと言う声に、二度とみることもないハルピンだと、急いで窓越しに駅付近を眺めました。新京（長春）は真夜中に通過。奉天（瀋陽）は朝でした。

二月二十六日、山海関を通過しました。天津を通過しました朝、黄河を渡りました。水は泥水で大きな広い河でした。その後は広々とした平野を列車は走り続けました。途中、駅で弁当を貰い、手洗いをすませました。

二月二十九日、揚子江（長江）に面する浦口と言う所に到着しました。河幅は一五〇〇メートルもありましょうか大きな河でした。話には聴いておりましたが揚子江の大きさにはびっくりしました。

浦口から船に乗り換えて川上に向かって走りました。間もなく立派な大きな街が見えましたので、聴きますと南京だと教えてくれました。支那

大陸の中央部に来ているのだなあと思いました。南京で上陸して歩きますと大きな城門が見えました。この城門が南京入城式の写真で見ました光華門と説明してくれました。少し歩きますと支那派遣軍司令部がありましたので、そこで休息しました。城門には無数の弾痕があり激戦を偲ばせました。

右に折れ左に曲がりしてやっと宿舎に到着しました。すっかり平穩になっておりましたので、留中に中山陵や孫文の墓をみんなで見学に行きました。

帰り道に潜りました城門は、脇坂部隊が南京一番乗りした城門と説明者から聴きました。宿舎の裏には鉄条網が張ってありましたが、そこに住民達が来て酒や卵を売っておりましたので、兵隊の中で買う者もありました。酒を買ったら水だったと大笑いする場面もありました。それ位平穩でした。

五日位休息して南京を出発することになりましたが、空襲を受けることを避けて夜間船で上流へ航行して、蓋口、安慶を通過し湖口に一時上陸しました。

四月十七日、漢口に到着。漢口は暑さのため雀も屋根から落ちる程暑いと聴いておりますが、事実暑い暑さで夜も寝つかれず困りました。住民達も歩道に寝台を持ち出して蚊帳を張り寝ていたようでした。

漢口で兵器や馬を受領し、歩兵砲中隊らしい装備を完結しました。ここで馬と生死を共にすることになりました。

広水と言う所より列車に乗りし信陽と言う町に到着しました。信陽は漢口より北一八〇キロ位の地であって、漢口との間に一日一往復列車が運行されておりました。この地を基点として湘桂作戦に参加しました。広々した平野に所々中国人の家屋があり、敵軍は昼間は家屋や森に隠れて、手薄と見たら襲撃するという戦法をとっておりました。

だけに油断は許されません。

信陽の町は城壁に囲まれた町で、泥壁の家屋が建っておりまして。歩兵砲中隊の宿舎には、イギリス風の木造の建物が割り当てられました。庭の前には川が流れておりましたので、馬は川原につないで休息させました。時折飛行機の爆音が聞こえますと急いで木蔭に隠しました。馬は歩兵砲を引つ張る貴重な兵器ですから大切にしました。

私達は信陽の街の東西南北の城門警備の任務に当たることになりました。南門の城壁の上に重機関銃を高射機関銃代わりに据えました。時折敵機が高く遠く飛来することがありましたが、たまたま朝六時頃、北東一キロの所を低空で銃撃しながら空襲して来ました。高度は百メートル位で北門の真上を二機、操縦士の顔が見える位低空だったので、歩兵砲を三発撃ちましたが命中しませんでした。その後は飛来することはありませんでした。多分高射砲が配備してあると思ったので、爆音も聞くことはありませんでした。

昭和十九年八月九日、湘桂作戦参加のため出発。重たい兵器は信陽に残しました。武昌の町から感寧の町までは列車に乗車し移動しましたが、その先は列車不通のため夜間行軍でした。昼間は空爆を受けるのを恐れ夜間行軍でした。この頃既に制空権は奪われていたのでしょうか、日本軍の飛行機はめったに見ませんでした。とにかく歩け歩けの行軍ばかりです。

応山と言う町に到着し警備に着くことになりました。前任部隊は大阪の部隊であったためか、時折襲来した敵軍と交戦し合ったと聴き緊張しましたが、九州部隊が駐屯し手強いと思っただけでしょうか、後は平穏でした。このようなことは中国大陸各所であったと聴いております。

敵のスパイは巧妙で、手強い相手とそうでない部隊とは調査し、九州の部隊は手強いので襲撃を止める作戦を繰り返していたようです。

応山から漢口へ逆戻りの歩け歩けの行軍でした。暑いので汗を拭き拭き重たい足を引きずりな

がら行軍しました。

漢口經由で南へ下ります。武昌から感興までは列車で、兵隊の中には列車の中で敵襲を受けたら逃げ場がないので、万一戦死でもしたらと心配し、列車に乗る前に手紙等を燃やす人もおりました。いっどこで襲撃されるか判らないのが中国の戦争でした。決して油断してはならないのです。

列車は百キロ位走って感興に到着、これからは列車不通のため、またまた夜行軍が始まりました。途中で馬の死臭を嗅ぎながら、敵機の夜間攻撃を見て自分達も空襲を受けるのではと、冷や冷やしながら歩け歩けでした。空襲によって燃える長沙の様子を見て三日三晩。長沙の町には立ち寄りぬまま南へ逃れて株州の町へ着きました。

株州の町は川に面した町でした。道路脇の民家に宿泊しました。明日はどこか不安でした。翌日は川向こうに出動し夜間攻撃に参加しましたが、途中で負傷者を抱えた部隊が後退して来ましたが、危険と見て私達の大隊も前進せず引き揚げま

した。

株州の町から東に進み、八月二十九日、湖南省の醴陵と言う町に着きました。醴陵の町に着いた頃は食糧が少なくなつて、米は分隊毎に炊いて食べましたが、副食がなく携帯味噌だけに、唐辛子の葉っぱだけで辛い味噌汁が数日続きました。やむを得ず庭の葉鶏頭の葉をむしり取って味噌汁の実にすることもありました。

醴陵には鉄道が通つておりましたので、時折汽笛が聞こえてくると郷愁を感じました。この地で一部の隊が前哨へ連絡のため四十人が夜間に出発し、途中で中国軍の襲撃を受け、負傷者が出ると言う突発事態が発生しました。

農民の姿をしているので気をゆるめるとたちまち中国兵となり襲撃して来るいわゆる便衣隊です。今回も便衣隊の襲撃によって戦死した人もありました。誰が兵隊で誰が農民かの区別がつきませんので油断も隙もありませんでした。

中支にも冬が訪れますと至る所、湖とクリークが多くありましたので、氷が張りました。北満ほどは厳しい冬ではありませんでしたが「上海だより」の歌の文句ではありませんが「銃にも氷の花が咲く」こともありましたし、「梅と兵隊」の歌の文句のように「湖上に薫る梅の花」のように風流な景色もありました。

醴陵で名前だけの正月気分を味わって過ごし、昭和二十年二月二日、醴陵を出発し南下しました。白い息を吐きながら山を越えました。山上から見える市街地は江西省の韓州でしょうか。

中支と南支の境界の山脈でしたが、梅嶺関と言う峠を一夜かかって越えました。アメリカの空軍機の攻撃を避けるため夜行軍ばかりでした。川に沿って坂を下った所で夜が明けたので川淵の空き家で宿泊しました。

蓮花、永新地域の残敵掃討作戦にも参加しましたが、敵はどこに逃げたのか一人もおりません。

それでも油断は禁物どこから出てくるか判りません。

二月二十五日より、逐州、漢州、南安地区の残敵掃討作戦にも参加、皆行軍です。

三月十九日、広東省の南雄及び湾内地区の警備と討伐戦に参加し歩き続けました。幸い大きな戦闘はなく助かりました。

四月二十日、昭和二十年軍令甲第一八号により編成が改正され、私達の井上大隊が独立歩兵第五九六大隊となりました。

警備する南雄の町は、ここもまた城壁に囲まれた町でした。中隊は城外の近い所で宿泊しましたら、翌朝銃撃の音で起こされました。川向こうのように直ちに出勤準備して待機しましたが出勤には至らずほっとしました。警備の交替を狙っての襲撃らしく、前任の中隊の話では、敵は宿舍のすぐ近くまで来ていて、中隊長が姿勢を高くして眼鏡で状況を見ていたら、狙撃されて意識不明の重傷を負わされたとのことでした。寸時たりとも油

断大敵の状況です。

上官の話では、立派な学校のような建物を搜索していたら教科書を見つけて、開いて見たら日本との関係の個所に、日清戦争では台湾を取られた、取り返さねばならない、日露戦争では遼東半島をとられ、満州の鉄道権も奪われた等が書いてあって抗日感情を煽っていたと。また歩兵操典があったので開いてみたら、蔣介石が日本の士官学校で勉強されたので、日本陸軍の操典を丸写しで、歩哨の守則も全く同じであったと話しておられました。

八月十三日、中支へ転戦するため湾内を出発したところが、前面の敵が白い旗を振って降伏せよと言って来たので、不思議に思っていた。

数日後大隊に合流し衝陽に着きましたら、全員集合を命ぜられ、終戦になったことを告げられましたので皆びっくりしました。終戦！ 敗戦！ がっかりしました。残念無念の涙が溢れ出まし

た。歩け歩け。山また山。川を越えて平原をと、敵を追って、馬と共に苦勞に苦勞を重ねたのになんと情けないことかと、がっかりしました。あの白旗は八月十日頃だったかなあ、敗戦濃いと見て降伏をすすめたのかと、改めて思い知らされました。

長崎市に原爆が投下されましたことも、この日に知らされ初めて知りました。敗戦の無念さと共に私達は日本へ帰れるのかと言う不安でした。

私達は重い足を引きずりながら歩きました。長沙へ入りますと、支那兵がずらりと線路の両側の高台に並んでおり、日本軍のトラックの残骸が横たわり、敗戦の惨めさを晒しておりました。背中の背囊も重く兵隊の中には、鉄帽や防毒面を「ええくそ」と川に投げ始めました。私も戦争もないからと投げ捨てました。

私達は船で安慶に送られ飛行場の跡地のような広い場所で、武装解除が行われ、アンペラで囲ったトラックに収容されました。

捕虜になったのです。使役にも狩り出されませんでした。福井中尉の発案で野球もやりました。毎日の生活も敵しいものではありませんでした。約五カ月この地での生活を続けました。

昭和二十一年三月中旬、日本への帰国命令が出ました。背囊いっぱい衣類等を詰めました。南京まで船で送られるので、乗船前に検査が始まりました。中国兵からめぼしい物を没収された者もありましたが、さしたるトラブルもなく、むき出しのダンベイ船に押し込まれました。

夕闇が迫って来た頃どこからともなく石が飛んで来ました。住民達が日本軍隊目掛けて投石しているんです。戦争に負けた悲しさはいかようにも仕様がありません。ダンベイ船が岸を離れてほっとしました。

南京で上陸、今度は近くの停車場からシートを張った無蓋貨車に乗せられました。支那兵が銃剣でシートを刺しながら連結器を足場にして貨車に乗り込み、近くの兵隊の背囊を取り上げるが、手

向かいもできずなすがままでした。

上海駅に着いた私達は歩いて宿舎へ、数日後岸壁より米軍のLSTに大隊全員が乗船し出帆しました。船中で上官が「みんなご苦労でしたね、北満の石門子から歩け歩けで頑張ってもらったが、計算してもらったら何と二一〇〇キロも歩いたことになる。この距離は北海道の知床岬から鹿児島県の佐田岬まで約二千キロだから、日本を縦断したことになる。良く頑張ってくれた有難う」と言われびっくりしました。

暑い中を、寒い中を、重たい足を引きずり夜道を戦々恐々として、歯を食いしばりながら、お互いに励まし合って歩き続けた姿が、走馬灯のように頭を駆け巡りました。良くも頑張ったなあと感じ無量でした。

誰かが「日本の島が見えるぞ」と叫ぶ声に「わあーっ」と叫びながら甲板に出ました「見える見える日本の島だ、山だあ」と、船中は歓声が湧き上がりました。帰って来たぞ日本へ…疲れが一度

に吹き飛んだ感じでした。

昭和二十一年三月二十一日、佐世保の針尾に船は着岸しました。上陸前に階級章を取外して上陸、DDTを吹きかけられ検閲終了、四年ぶりに踏みしめる懐かしい日本の土、まるで夢のようにした。宿舎で二泊しました。軍服も着替えて三日目の朝、行先別に整列してお互いに別れの言葉を言い交わして、南風崎駅より列車に乗り込みました。

列車も混み合って大変でしたが、一時間でも早く帰ろうと思う気持ちは、少々の混み合いはへいちゃらでした。諫早駅で島原鉄道に乗り換えて吾が家に着いたのは夕方でした。私の元気な姿を見て父も母も兄弟達も、涙を流して喜んでくれました。

父は涙を流しながら戦死された近所の人々を教えてくれました。「えっ、えっ」と名前を聴いて驚くばかりでした。知らぬ間に手を合わせておりました。戦争の苦しみは戦争に行っただけが判

る苦しみです。気の毒にとつぶやきながら安らかなご冥福を祈りました。二度と戦争の悲劇を繰り返してはならない。誰にも私達が行った二一〇キロの苦しみを味合わせてはならないと心に誓いました。

国の為 命捧げし 人々の

真心しのびて 涙溢るる

馬と人 歩きつづけて 四年余に

越えし山坂 二一〇〇キロ

三回死から逃げられた運

長崎県 長田久徳

私は大正十二（一九二三）年一月三十日、福岡県門司市で生まれました。父は小倉連隊の獣医でした。私の初誕生日の頃若死にし、兄弟はなくて、母一人子一人の家庭で成長しました。学歴は

県立門司中学校卒業で、門司鉄道局用品課へ奉職し、汽車の石炭購入のため、ほとんど九州全域の炭鉱を巡りました。

昭和十八（一九四三）年徴兵検査、甲種合格、母一人子一人の家ながら気丈な母に励まされて、昭和十九年三月十五日現役兵として福岡の歩兵第一一三連隊補充隊へ入営しました。

朝鮮經由満州へ、幹部候補生を命ぜられる。満州を転々と移動し、西部軍管区司令部に転属され、朝鮮を経て九州の久留米へ、終戦。陸軍少尉に任官。召集解除復員しました。

福援恩証第四六〇九号履歴証明書に正確、詳細に証明してあります。

概説しますと、私の軍隊での労苦体験はなかったと言えましょう。当時、満州はまだまだ食料は豊かで、内地から来た我々はビックリする位でした。加えて慰問袋は沢山くるし、冬寒くなるとパーチカをたいて暖かいし、パーチカの上へリン